蕎麦の常識非常識

「平家落人（おちうど）」の暮らしと蕎麦

椎葉村と奥祖谷を訪ねる

壇ノ浦の戦いで敗れた平家一族は源氏の追っ手から逃れ、命からがら逃げ込んだ先は全国で二百か所（真偽は別として）を超えるともいます。

それ等は殆ど人里離れた山奥の秘境であったり、無人の孤島や断崖絶壁の海岸等で、再興を企てる様子もなく、農耕に勤しみながらひっそりと静かに暮らし続けたと伝えられています。

祇園精舎の鐘の音、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色　盛者必衰（じょうしゃ）の　理（ことわり）　をあらはす。奢れる人も久しからず、ただ春の夢のごとし。猛きものもついには滅びぬ、ひとえに風の前の塵に同じ」

・・・この「平家物語」冒頭の叙述は仏教の無常観を表す名文として広く高い評価を得てきました。とりわけ、琵琶法師の弾き語りを聞いて世の無常と儚さに触れ、平家一族への同情が高まったことは無理からぬことであったと思われます。

平家落人伝説はこういった世論を背景とした中で伝承されてきたことを認識しておくべきでしょう。

平家落人が隠れ住んだといわれる人里離れた山奥の秘境では、当然のことながら多量の水を必要とする水稲の栽培は困難でしたし、温暖な気候を好むコムギの栽培にも適せず、雑穀類（ソバ・ヒエ・アワ等）の耕作に頼らざるを得なか

ったのです。中でもソバは冷涼の地を好み、水はけの良い傾斜地でも育つ特性があり、おまけに播種後の雑草取りや手入れの手間がかからず、短期日（二～三か月）での収穫が可能なので、農耕作業の経験の少ない落人たちにとっては、この上ない格好の食材だったといえましょう。かくして「平家落人→深山秘境→ソバ栽培」の関係が出来上がったのです。

これから紹介する「宮崎の椎葉（しいば）村、徳島の祖谷（いや）村」は、いずれも著名なそば食（そば米やそば団子・おやき等）の地なのですが、現地を訪れてみるといずれも平家落人伝説を代表的する地でもありました。

宮崎県の「椎葉村」を訪れたのは二〇一四年八月のことです。

千メートル級の山々に囲まれた村全体が平均標高六〇〇ｍという高地にあり、熊本から車で椎葉村の村役場のある中心地まで約二時間、そこから更に狭い山道を走ること約一時間、宿泊予定の民宿「焼き畑」（椎葉クニ子さん一家が経営する）に到着したのはまだ午後四時だというのに夕闇が辺り一面に漂っていて、壇ノ浦の戦いに敗れた平家落人が逃げ込んだというに相応しい秘境でした。

平家落人伝説はたくさん残されているのですが、その中の一つに「那須大八郎と鶴富姫の悲恋物語」があります。

平家落人の噂を耳にした鎌倉幕府は那須大八郎（屋島の戦いで扇子の的で有名な弓の名人那須与一の弟とされる伝説上の人物）に追討の命を下すのです。

祖谷

大八郎は手勢を引き連れ椎葉村に向かうのですが、そこで見たのは、平家再興を企(たくら)む様子もなく静かに農耕生活を送っている落人たちの姿でした。

大八郎は深く感動を覚え、幕府へは「討ち果たしました」と報告をして自らは椎葉村に住み着き村民に農耕の指導などをして暮らしていたのですが、いつしか平清盛の末裔といわれる美しい鶴富姫と恋に落ちるのです。しかし幕府からは大八郎に鎌倉へ戻るよう非情な命令が届きます。やむなく大八郎はわが子を宿した鶴富姫に「生まれた子が男なら国表(くにおもて)へくるように、女子ならそのままでよい」との言葉を残して鎌倉へ泣く泣く帰って行く・・・という悲恋物語です。

これは、ご存じ椎葉村の民謡「稗搗(ひえつき)き節(ぶし)」にも歌われています。

「庭の山椒の木に　鳴る鈴かけて　ヨーオーホイ　鈴のなるときゃ　出ておじゃれヨー
鈴の鳴るときゃ　なんと言て出ましょ　ヨーオーホイ　駒に水くりょと　言うて出ましょ
那須の大八　鶴富おいて　ヨーオーホイ　椎葉立つときゃ　目に涙ヨー」

またソバに関わる次のような逸話も残されています。

ある朝目覚めて戸外へ出てみると一面に源氏の白旗がはためいているではありませんか。落人たちは「すわ源氏の討伐軍襲来か」と驚き慌てふためくのですが、よくよく見ると、それは源氏の白旗ではなく一面に咲き誇るソバの白い花だった・・・というのです。椎葉村の山の斜面一帯に、古くから伝わる焼き畑農法でソバが栽培されていた様子を窺わせる逸話ではないでしょうか。

あいにく火入れ当日は雨の予報で「焼き畑は中止する」と事前連絡があったのですが、この機会を逃したらクニ子おばばと会えなくなるのではと考え、友人とともに椎葉村行きを強行しました。一時間を超えるクニ子おばばとの懇談もやっと実現したのです。「なぜ焼き畑を続けているのですか？」という私の質問に、「止めたら縄文時代から続くソバ種がなくなってしまう」というおばばの言葉が脳裏に深く焼き付いています。八十九歳のおばばの語る使命感です。（椎葉クニ子さんは二〇二三年に九十九歳で逝去されました・・・写真左から二人目が椎葉クニ子さん）

民宿での夕食はすべて椎葉村で獲れた食材を使った料理でした。そば料理はこの地に古くから伝わる「わくど汁」が供されました。「わくど」というのは蛙を指すこちらの方言で、煮えたぎる汁の中のそば団子の激しい動きが蛙の泳ぐのに似ているところから付けられたということです。

翌日は傘を差しながら火入れ予定地を長男の勝さんの説明付きで見学しました。一度火入れをすると、ソバ、アワ・ヒエ、小豆、大豆の順に四年間栽培を続け、その後は二十年以上自然が戻るまで放置する自然循環順応型の焼き畑で、南米辺りの自然を破壊する森林伐採とは一線を画するものであることが確認でき

ました。私たちが訪問した翌年に「世界農業遺産」登録が実現したのです。

続いて徳島・東祖谷村ですが、ここにも平家落人とそば食の伝説がありました。

屋島の戦いに敗れた平国盛（たいらくにもり）ら平家落人四十人余りが幼い孝徳天皇を奉じながら讃岐山脈を越え山深い阿波の国（現在の徳島県）を東へ東へと逃がれて東祖谷に住み着いたという伝説です。徳島県三好市にある落合集落は切り立つような山の急斜面に家が張り付くように点在していて（写真参照）国の「重要伝統的建造物群保存地域」に指定されています。

そんな地域ですからイネやコムギの栽培など出来よう筈もなく、ソバ・ヒエ・アワ等の雑穀が常食されていたことが容易に推測されます。祖谷の「ソバ米（こめ）雑炊」（ソバ粒のまま野菜や肉と一緒に炊きこまれた雑炊）は現在でも普通に食することが出来る郷土料理ですが、元を正せばその昔平家の落人たちが都を偲んで正月料理として作ったのがそもそもの始まりだとされています。

またソバをはじめとした雑穀が製粉されて常食されていた様子を伝えるものに祖谷の民謡「粉挽（こひ）き唄」があります。落人たちが都に想いを馳せながら深夜までソバやヒエなどの雑穀を石臼で挽く過酷な労働を癒す仕事唄として歌われて

いたと伝えられています。

祖谷のかずら橋ゃ　蜘蛛の巣のごとく　風も吹かんのに　ゆらゆらと
吹かんのに　吹かんのに風も　風も吹かんのに　ゆらゆらと
都想えば　月さえ曇る　飛んで行きたや　あの空へ
行きたや　行きたや飛んで　飛んで行きたや　あの空へ

「かずら橋」は西祖谷と東祖谷の境界に架かっていて、これを東に渡るといよいよ奥祖谷に入ります。橋の材料はシラクチカズラと呼ばれる植物の蔓を手作業で編み込んだもので、追っ手から逃げられるようにいつでも切り落とせるように植物で作ったといいます。

平家屋敷民俗資料館をはじめ、平国盛が平家再興を願って植樹したとされる樹齢八〇〇年余りの古木「国盛杉」や、落人たちが都を偲びつつ滝の前で琵琶を奏でたと伝えられる高さ四十㍍に及ぶ「琵琶の滝」（写真参照）など・・・平家落人の名残を留める諸跡が目白押しです。

平家物語にある「奢れる人も久しからず、ただ春の夢のごとし」を脳裏に刻みながら過酷な日々を送っていたのでしょう。

この他にも、福島県最南西部にあり尾瀬の入り口ともいえる日本で人口密度

最過疎地とされる秘境「桧枝岐村（ひのえまた）」があります。この地も「平家落人と裁（た）ちそば」で著名な処なので、ぜひ書き加えたいところなのですが、紙幅の関係上今回は割愛させて頂きます。

祖谷